

ばくおん！

グラン(団長)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

けいおん！の二次小説になります。

某女子高生とバイクのアニメとは関係ありませんのでご注意ください。

バンド好きな主人公がけいおん！の世界でバンド活動をしながら、キャラクター達と絡んでいく予定です。

現在就活中のため、気の迷いで書いてます。

エタリストなのでご注意ください。

7	6	5	4	3	2	1
羽	話	話	話	話	話	話
47	33	27	21	13	6	1

目次

1話

「今日はありがとうございました」

「いやいや、こっちのセリフだよ。君達のおかげでお客さんいっぱい来てくれたし、これバックね」

今日も無事ライブが終わった。

ここらの界限ではだいぶ名が売れてきたおかげか、30人ぐらいのお客さんが毎回入ってくれている。

ありがたい限りだ。

「それじゃまたよろしくね。君達そろそろCD作ったら？レコーディングしたくなったら、ちよつとは安くするからぜひ言ってね」

「おーバンド内でもそろそろCD作りたいうって話上がってるんでお願いすると思います、詳細が決まったら連絡しますね」

「オツケー、待ってるね」

精算が無事終わり、外で待ってるメンバー達に合流する。

「精算終わりましたー。これバックです」

「お、今回もなかなか入ったみてえだな。まあ、俺は今は金に困ってねえし俺の分はトシにやるよ」

「僕も、トシ君の生活費にしてよ」

「もちろん私のもね」

「……毎回すいません、ありがたいっす」

毎度の事ながらメンバーのみなさんには頭が上がらない。

バンド内で俺が唯一の学生で、みなさんは社会人という事もあるが、大人の余裕が眩しい。

「トシまた新しい機材買ったんでしょ？このバンドの曲はほとんどト

シ君が作ってくれてるんだし、それくらいはね」

ギターの河口さん。

メンバー唯一の女性で紅一点的な位置だが、ショートカットで遠目に見たらただのイケメンである。

「そうだよ、僕達は仕事してるけど、トシ君は学生で一人暮らししてるんだもん。それくらいは大人に甘えてよ」

ベースの原さん。

眼鏡をかけた優しい雰囲気……というか普通に優しい人。

こう見えてライブになると荒れ狂う、演奏中にベースのヘッドが襲ってくるが多々ある。

「まあ、俺達はライブができりや満足だからな。出世払いで大人になつたら酒でも奢ってくれりゃいい」

ドラムのコリアスさん。

筋肉ムキムキのハーフ、生粋の日本育ちのため英語は喋れないらしい。

実はどこかの社長らしく、メンバー内で一番お金持ち。

「ありがとうございます……、そういえば川上さんがRecしないかって。少し安くしてくれるそうですよ」

「お！そいつはいいな！曲もそこそこあるし、ミニアルバムでも作るか」

「僕も賛成、今は仕事も忙しくないしちょうどいいね」

「私も同感、それじゃあどの曲録るか考えておこうか」

「了解です、曲と、いつ録るかですね。それじゃあそれぞれ入れたい曲と都合のいい日にちをメールしてください。まとめておきます」

「さっすがリーダー頼りになるぜ！」

リーダーって……、まあこのバンドに誘ったのは俺だけでも、このメンツの中でリーダーを名乗るのはハードモードだよ……。

「あ、あの!!!」

「ん?」

声をかけられた気がしたので振り返るとツインテールの女の子がいた。

「どうかした?」

『i n v i d i a』のボーカルの方ですよね!!!ライブが見てました!すごいカッコよかったです!!!」

「おお!見てくれたの!ありがとね!みなさん、この子ライブ見てくれたらしいですよ、カッコよかったです!」

「おお!こんなちっちゃいのにハードコアにはまっちゃうなんて、不良だなあ!!!最高じゃねえか!!!」

コリアスさんが脇の下に手を入れ、そのまま持ち上げ回りだす。

場合によってはセクハラで訴えられる状況だが、女の子が小さいのと、ムキムキハーフだがイケメンなおかげで微笑ましい光景に見えなくもない。

まあ、我々『i n v i d i a』は先程コリアスさんが言ったようにハードコアバンドなため、女の子のファンなんてめったにいないからコリアスさんも嬉しいのだろう。

「ほらコリアス、その子目回しちやってるから下ろしてあげな」

「おお!そいつはわりいことしちまったな、すまねえな嬢ちゃん!」

「ううう……、だ、だいじよぶです……!」

パツと見大丈夫じゃなさそうだけど、いい子やなあ。

「うちのゴリラがごめんね。君みたいな若い女の子のファンは珍しいから、年も考えずにはしゃいじやったみたいで」

「い、いえ、大丈夫です。あの、もしかしてギター弾かれてた……？」

「そうだよ、河口紀美、よろしくね」

「私、中野梓っていいいます!!!私もギター弾いてて、それで、凄い上手だなんて思っつて、フレーズもカッコよかったし……」

「ははは、ありがとね。でも、うちのバンドの曲を考えてるのはほとんどトシなんだよ」

「そうなんですか!?!」

うわ、こつちに矛先が向いた。

こんな目キラツキラされるとなかなかこつぱずかしいな。

「いや、ソロフレーズとかアレンジとかはみなさんに任せきりですし」「いやいや、持つてくるdemoの段階であそこまで完成度高いとこつちも気合い入れなきやいけないからね」

「でも、みなさん凄かったです!ギターはもちろん、ドラムはあんな早いブラストビートを簡単そうに叩いてましたし、ベースはソロのスラップにパフォーマン스에 圧倒されちゃいました!」

中野ちゃんの力説にそれぞれ、いやいや、とか言いながらまんざらでもなさそうな顔をしてる。

まあ、この人達普通にプロでやっててもおかしくないからな。

たまにスタジオミュージシャンとして誘われることがあるみたいだし。

「それに、ボーカル!私、あんなに歌が上手い人初めて見ました!それにデスボイスもすごい音量でしたし、ギターを弾きながらあれを歌うなんて……感動しました!」

「おお、あ、ありがとね。今Recするって話してて、そのうちCDが

できると思うから、よかつたらまたライブ見に来てよ」

「本当ですか!?絶対行きます!!!……あ、すいませんお話中だったのに急に声をかけちゃって。……わ、わたし、また来ますから!がんばってください!!!」

そう言う中野ちゃんは早足に帰ってしまった。

途中で我にかえって恥ずかしくなったらしい、顔が真っ赤だったなあ。

「……行っちゃいましたね」

「いい子じゃねえか、こりやR e cも全力でやらなきゃならねえな」

「当たり前でしょ、手抜きなんてしたらトシに首にされちゃうよ」

「いや、そんなまさか……」

「それは困る、僕も家に帰って練習しようかな」

「原さんまで、あまりからかわないでくださいよ……」

「ははは、ごめんごめん。それじゃあそろそろ解散しようか、トシ君明日も学校あるでしょ?僕も仕事があるしね」

「おう!そんじゃ、俺も帰るとするか。今日も楽しかったぜ、じゃあな!」

「私も、いろいろ決まったらメールするから。さわ子によろしくトシ。じゃあね」

「お疲れ様でしたー。またよろしくお願いします」

こうして今日も無事ライブは成功でした。

平日は学校に行き、曲を作りながらたまにライブをする。

K—ON!の世界に転生した俺、山中斗心の日常は今のところこんな感じである。

さて、次はどんなバンドの曲をオマージュしようか。

2話

「お疲れ様です」

「お疲れー、トシ君学校もあるのに頑張るねえ」

「欲しい機材は尽きないっすからねえ……」

「さすが、今度CD作るんでしょ？俺も欲しいからライブ決まったら教えてよ」

「あざっす、了解です」

学校終わりのバイトはキチイぜ。

まあ、楽器屋だから暇なとき試奏とかさせてもらってるから楽しいんだけどね。

曲作る時間も欲しいからなあ……、新しい曲はCHONみたいなのにしようと考えている。

ハードコアの曲だけだとお客さんも限られちゃうし、どうせならいろんなジャンルを手広くやりたい。

テクニクは問題ない、今までもハードコアだけじゃなく聴かせる曲もやってきたし、メンバーみなさんオールマイティーにどのジャンルでもやれるようになった。

河口さんにクリーンのアルペジオを弾くように頼んだときは大変だった……、歪みがないと体が疼くらしい。

「トシ君！お客さん来てるから！バンドの事考えるの一旦ストップ！」

「あ、すみません。じゃあ、ちよつと行ってきますわ」

危ない危ない、過去に思いを馳せるところだった。

というか若干馳せてた。

お客さんは、……あれは高校生かな？

四人の女子高生がギターを見ている。

本来店員として、うちのブランドのギターをおすすめるべきなん

だが……、ありやもうGibsonに心奪われてるな。

「いらつしやいませえ、ギターをお探しですか？」

「え、あ、はい。私、ギター初心者でギターを探しに来たんですけど……」

「なるほど、……初心者の方でしたら安めのギターで練習をするというのも手ではありますね」

「……そうですねえ」

「ですが、長く使うというのであれば最初から高いギターを買うのも私はいいと思いますよ。見た目で選ぶという方も多いですから」

「そうですね!!!」

おお、シヨボンってしたと思ったらいきなり元気になった。

よっぼどこのギターが気に入ったんだな。

……しかし、25万するぞこれ。

さすがに高校生には高いと思うんだが。

ん？なんか四人で集まって相談始めたな。

「おい、唯。本当にそのギターにするのか？25万だぞ？」

「でもね、りっちゃん。店員さんも言ってるよ？見た目で選ぶ方もいますって！」

「そうだよね、初めての楽器なんだし、気に入ったヤツがいいよね」

「そうか、……こうなったら、やはり値切るしかないか！」

「あ！それじゃあ私が値切ってみてもいいですか？私、やってみたいですー！」

「おお！行ってくれるかムギ隊員！」

「任せてくださいりっちゃん隊長！」

どうやら相談が終わったらしい。

値切りかあ、……正直一バイトの俺にはそこまで権限はないんだけどなあ。

「あのお、……値切ってもいいですか？」

「……少々お待ち下さい」

よく見たらこの子社長の娘さんっぽいし、社員さんに丸投げしよ。

――

――

――

――

「これくらいでいかがでしょうか？」

「5万円?!?! ムギ隊員、……お前いったい」

「実は、パパがここの社長なの」

どうやら後ろでは値切り交渉が捗ったらしい。

すみません社員さん、俺には社長令嬢を止めることはできなかったよ。

「……で、今教えたコードを順番に鳴らせばフレーズができますよ」

「えーと、これと、これと、これで……すごい！ギター弾けた！ねえねえ見て見てみんな！私ギター弾けるようになったよー！」

喜んでもらえたらしい、ずっと物欲しげに眺めていたので試奏をしてもらった。

Green Dayは簡単なパワーコードだけで弾けるから初心者にはやりやすいと思う。

「おおーやるな唯ー！」

「すごいわ唯ちゃん！」

「そのフレーズカッコいい、……なんの曲？」

「え、わかんない。店員さん、なんて曲ですか？」
「え、あーと、海外のバンドの曲ですよ」

ちなみにこの世界では、有名なプレイヤーやバンドはいるのだが、曲が若干変わっている。

著作権の関係かな？

前世の記憶で探してみたら微妙な違和感がありまくりで気持ち悪くなつたのはいい思い出だ。

いや、よくはねえか。

「それより唯、ムギにお礼言えよ。なんとそのギター5万円で売ってくれるってよ」

「ええ!?!ほんと!?!ムギちゃん!!!ありがとうとおく!!!」

「うふふ、これで唯ちゃんも一緒にバンドできるわね」

おお、女子高生が抱き合ってる。

これはいい百合ですねえ。

抱き合う前にギターを下ろしてくれと思わないでもないが、ほとんど購入決まったようなものなので野暮は言うまい。

こうしてまた新たなバンドマンの門出に立ち合えたのは嬉しいことである。

というか今原作始まったぐらいのそこだったんか……。

――

――

――

「お買い上げありがとうございますでしたが、またなにかギターのこと質問があるようでしたらいつでもいらしてください」

「はいーありがとうございますー!」

元気がよろしい。

あと後ろのカチューシャしてる子、頼むから社長の娘さん使ってドラムセット安く買うとか怖いこと言わないで。

いいぞ真面目そうな子、まとも粹っぽい、頼むからカチューシャの子を押さえといてくれ。

これ以上あれやられると経営難不可避だからね。

「「「ありがとうございますー」」」

「またお越し下さい」

先輩がぐったりしている。

「どうしたんですか先輩？」

「……店長に怒られるかなあ」

「……そんときや俺も一緒ですよ」

――――

――――

――――

――――

――

「すいませーん」

「ああ、いらつしやいませ。本日はどんなご用ですか？」

「この前教えてもらったコードは弾けるようになったんですけど、他が全然わからなくて。……オススメの本とかありますか？」

「でしたら、こちらの猿でもわかるシリーズが個人的にはオススメですね。題名通りに初心者の方でも分かりやすいですし、簡単で有名な曲の楽譜も載っているので飽きずに練習できると思いますよ」

「じゃあそれを買いますー」

まさかの即決。

ギター弾きたくて仕方ないんだろうなあ。

わかる、わかるよ、my new gearって気持ち。

「うちでは楽器教室もやってますから、もし興味があつたらぜひ。マ
ンツーマンで教えてもらえますし、体験教室もありますから」
「楽器教室！いいなあ！私も……」

突然なにかを思い出したように固まってしまった。
新たな顧客を確保したと思ったのだが。

「大丈夫ですか？」

「……テストが、あります」

「なるほど、……でしたらテストが終わったらまた言っただけ
ば、体験教室でできるよう手配しますよ」

「本当ですか!？」

「はい、一応お名前をうかがってもよろしいですか？」

「平沢唯っていいいます！」

「平沢唯さん、……はい、ありがとうございます。では、テストが終わ
りましたまたいらしてください」

「ありがとうございます！それじゃあまた来ますね！」

「お待ちしております、テスト頑張ってくださいね」

原作主人公は走って去って行った、さすが主人公だけあつてエネル
ギーが違うな。

精神年齢40近くいつてる内面おっさんとはレベルが違うぜ。

――――

――――

――――

—
—

「……追試になってしまったので、まだテスト勉強が終わりません」
「……でしたら追試が終わった頃に体験教室することにしませうか。……あの、追試頑張ってくださいね」
「はい、ありがとうございます」

なんていうか、リビンググデッドって感じだったなあ。

3話

「ちよつと聞いてよトシ、私軽音部の顧問になっちゃったんだけど」

「はいはい、よかったですね」

「よくないわよ！顧問っていろいろ大変なんだからね、部活で休みもなくなるし、いろいろ手続きもあるし」

「はいはい、大変大変」

「ちよつと、ちゃんと聞いているの？」

「はいはい、聞いている聞いている」

「聞いてない」

酔っぱらいのダル絡みは犯罪だと思う、いやマジで。

どうやら姉さんが軽音部の顧問になったらしい。

正直やつとかと思わなくもないが、まあアニメと違って生活してるから長く感じるのはしょうがないだろう。

「つーかわざわざ愚痴りに来たのかよ……明日も学校だろ？」

「いいじゃない姉弟なんだから、着替えも置いてあるんだし。それにあんたの家のが学校に近いしね」

「まあ、別にいいけどよ。……俺これからRecしに行くから適当に寝て」

「高校生のくせに夜遊びとはいい度胸ね、どんどんやれ」

「おいそれでいいのか教師」

「いいわよ別に、紀美もいるし、コリアスさんも原さんもいい人達だしね。あ、私もまたバンドやりたいな」

「やりやいいじゃん」

「ダメよ、これでも学校では優しく美人な学校中の憧れさわ子先生なんだから」

「はいはい、ワロスワロス。そんじゃ行ってきます」

「あんた覚えてなさいよ。……気をつけてね、行ってらっしゃい」

さてと、そんじや記念すべき発Recだし、気合い入れて行きますか。

――――

――――

――――

――

――

「……すみません、今のところもう一回録っていいですか？若干音程が気になったんで」

「いいわよー、それじゃ2小節前からいくわね」

――――

――

――

「クソ！すまん、気に入らねえから今のところもっぺん頼む」

「はい〜」

――――

――

――

「すみません、ちょっとシールド外れてしまったんでもう一度お願いしますね」

「あの、原さん？Recだから別に動かなくても、……いや、なんでもないわ。それじゃいくわね」

――――

――

「なんか今のところ変じやなかった？」

「特に変には感じなかったけど……」

「いや、気になるからもう一回弾くわ」

「……オツケー」

――

――

――

「なんとか終わりましたね……」

「こうなるだろうとは思ってたけど、実際やってみると疲れるわね……」

現在深夜3時、8時頃から初めてR e cに6時間、簡単なm i x作業で1時間。

川上さんが死にかけてる、今度お礼になんか持ってこよう。

「いやあ、久しぶりのR e cは楽しいぜ！なかなかいい感じになったんじゃないか？」

「そうだね、これならみんな納得してくれるんじゃないかな」

「まあもうちよつと詰めたい所もあったけど、これ以上やったらねえ……」

川上さんが河口さんのセリフで一瞬ビクッてなった。

さすがに俺もこれ以上は勘弁して欲しい、明日の学校が厳しくなりそうだ。

しかし、5曲入りのミニアルバムをこの時間でできたのはメンバーのテクニクがあつてこそだ。

「これなら次のライブの時には物販に並べられますね」

「CDのデザインはトシの持ってきたのでいいだろうし、俺のツテでプレスはしておく」

「さすが社長、頼りになる」

「ハツハツハ！任せておけ！」

正直本当に助かる。

業者に頼むにしてもやり取りが大変だから、それがないだけでもだいぶ楽になる。

さあ、あとはライブでどれだけ捌けるかだ。

――――

――――

――――

――

――

「よろしくお願いします！」

「はい、よろしくね。まずは自己紹介からでしょうか、俺は山中兔心。トシって呼ばれてる」

「トシさんですね！平沢唯っていいます！唯って呼んでください」

「唯ちゃんね、よろしく」

さて、今日は唯ちゃんの体験教室当日である。

まあ、講師は俺なんですけどね。

バイトのはずなんだが、ライブを見に来てくれた店長が「you、ギター弾けるやん」って言ってそのまま講師になってしまった。

「ジーーーー」

「えっと、なにかな？」

唯ちゃんがすごい見てくる。

「トシさんって、さわちゃん先生の弟さんですか？」

「あ、バレた？後で言つてビツクリさせようと思つただけど」

「やつぱり！なんとなく似てるなあーって」

「軽音部のことは姉さんから聞いてるよ、唯ちゃんのことにも初心者なのに頑張ってるって」

「えー、照れるなあ」

まあ、但し書きで「あれで勉強も頑張ってくれば」ってつくんだけどね。

「とりあえず時間ももつたないし、練習を始めようか」

「はい！」

「まずは手のストレッチから始めよう」

「ストレッチ？ギターは弾かないんですか？」

「ストレッチをしておくと言が動きやすくなるからね、練習の前にやっておくといいよ。こうやって指を順番に開いて、閉じてを繰り返していく」

「なるほど！よーし！……あれ、こ、この！む、難しい」

「最初は誰でもそうだよ、ゆっくり順番にやっさいこう」

――

――

――

「さて、それじゃあギターを弾こうと思うんだけど……、唯ちゃんチューナーは？」

「ちゅーなー？ってなんですか？」

「チューナーっていうのはギターの音程を合わせるのに使うやつなん

「だけど……、え、今までどうやってチューニングしてたの？」

「えつと、弾いてみて違うなあって思ったら、こうやって……、はい！」

「……あー、絶対音感持ちか。おけ、大丈夫」
「ん？」

「そーういや絶対音感持ちって原作でも言ってたわ。

チートやなあ、いいなあ。

「とりあえず簡単なコードから弾いていこうか」

「はい！あ、この前の曲弾きたいです！」

「オツケー、あれはね……」

――――

――

――

「ありがとうございます！」

「いや、まさか1曲完璧に弾けるようになるとは……。初心者とは思えないね、唯ちゃん才能あるから頑張ってるね」

「はい！頑張ります！」

原作主人公はさすがだったよ。

軽音部はみんな顔面偏差値も高いし、出るところ出たらサイサイみたいに売れそうだよなあ。

「……あのお、すみません」

「トシさん！お客さんだよ！」

「え、ああ、ありがと。……君は」

そこには、この前ライブに来てくれていた女の子、中野梓ちゃんがいた。

あれ？俺ここでバイトしてるって言ったっけか？

「あの、この前ギターの河口さんに偶然お会いして、そしたら山中さんがこのお店でギター講師をしているとお聞きしたので、教えてもらいたいなと思つて……」

「あー、河口さんか。うん、全然大丈夫だよ、ちょうど今唯ちゃんに体験教室してたところだから」

「私平沢唯一！よろしくね！あなたもギター弾くの？」

「あ、はい。中野梓と言います、よろしくお願ひします。ギターはまだなので山中さんに教えていただこうと」

「じゃあ、あずにゃんだね！」

「あ、あずにゃん？」

唯ちゃんのコミュ力は見習うべきものがあるよね。

俺じゃあ初対面の人にはこんな絡みはできない。

「えー!?トシさんバンドもしてるの!?!」

「え、あ、うん」

「山中さんのやつてる『Invidia』ってバンドは、この辺りじゃ知らない人はいないぐらい有名なバンドなんですよ！」

「えーいいなあ、私も見てみたいなあ」

「あー、よかったらCDもつてく？サンプルで何枚かあるからあげるよ。はい、中野さんも」

「え、いいんですか!?!」

「うん、今度レコ発ライブするからぜひ見に来てね」

「行きます！絶対行きます！」

「あ、ずるい！私も行く！」

お客さんが増えるのはいいことです。

どうやら二人は意気投合したらしく、連絡先を交換している。今度のライブに一緒に来てくれるらしい。

「それじゃあ私は帰るね、トシさんもありがとね！私ギター教室やることにするよー！」

「毎度ありがとうございます、気をつけてね帰ってね」

「CDありがとねー！みんなにも聴かせてあげるから！あずにゃんもまたね！ライブ楽しみにしてるからー！」

元気やなあ、あんなに走って転ばないといいけど。

「元気な人ですね……」

ですよね。

「それで、どうする？俺はこの後時間あるから、中野さんがよければ体験教室できるけど」

「いいんですか!?!」

「いいよ、こちらとしてもお客さんが増えるのはありがたいからね」

「それじゃあぜびー！」

ありがてえ、ギター講師は歩合制でお客さん増えれば増えるほどお賃金上がるからなあ。

……というか若干原作崩壊させた気がしなくもないけど、気のせいだよね？

4話

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

「次で最後の曲だ！今日はありがとう！最後まで楽しんで行ってくれ
!!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

最前列でもみくちやになりながら、周りに合わせてメロイックサイ
ンもどきを掲げる唯ちゃんの姿に笑いそうになってしまう。

唯ちゃん、それメロイックサインじゃなくてキツネや、baby m
e t a i じゃないんだから。

いや、「うおおおお」じゃなくて。

まあ、楽しんでくれてるようだなによりである。

河口さん、原さん、コリアスさんと視線を交わす。

次で最後の曲だ、ライブハウスのボルテージは最高潮、体力だけ
じゃ足りない、魂引きずり出していかないと。

「それじゃいこうか、……全力でかかってこいやあっ!!!」

—————

—————

—————

—————

—————

「カッコよかったよトシさん！もうぐわあああってなってど
しやややってなってごおおおおって!!!」

「はいはい、ありがとね唯ちゃん。最前列にいるの見えてたよ、怪我し
てない？」

「うん！すごい疲れたけど、すごーい楽しかった!!!」

楽しんでもらえてよかった。

こうして初めて見てくれた人が楽しんでくれるのはバンド冥利に

尽きるというものだ。

この瞬間に、バンドをやっていてよかったと心底思う。

「みんなもすごいかったって言ってたよ！ね！みんな！ね！」

唯ちゃんの視線の先には、前に唯ちゃんと一緒にギターを買いに来た女子高生3人がいた。

「ああ、ギターを買ったときの。来てくれてありがとね、うるさかったでしょ」

「いえ、すごかったです。確かに激しかったけど、でも激しいだけじゃなくて綺麗なフレーズもあったし……。な、律！」

「うんうん！ドラムもすごい音量だったし！すごいカッコよかったです！」

「ありがとね、唯ちゃんに話は聞いてるけどみんなも楽器をやってるんだよね？メンバーの人と話してみる？勉強になると思うよ」

「本当ですか?!私田井中律っていいいます！パートはドラムです！ほら、漣もベースの話聞きに行こうぜ」

「わ、私、秋山漣って言います。話は聞きたいけど、でも、ベースの人ちよつと怖そうだし……」

この子はちよつと人見知りかな？

……まあ、人見知りじゃなくても原さんはパフォーマンスだけ見ると狂人のそれだからな。

「原さんはライブ中はあれだけど、普段はすごく優しい人だから大丈夫だよ」

「え、じゃ、じゃあ少しだけ……」

二人をそれぞれ原さんとコリアスさんに紹介する。

二人ともいい人だしすごいプレイヤーだから勉強になるだろう。

「えーと琴吹さんで合ってるかな？」

「はい、琴吹紬といます。気軽にムギちゃんと呼んでください！トシさんですよ？ライブ、すごかったです！上手く言えないけど、とにかくすごかったです！」

「お、おお、ありがとうね。残念ながらうちのバンドにキーボードはないけど、俺が打ち込みを作ってるから少しなら話もできるよ」

「打ち込み？……途中に入っていたキーボードの音ですか？」

「そ、ノートパソコンを繋いであらかじめ作っておいた音を流してるんだよ」

「そんなことができるんですか!？」

――

――

――

軽音部のみんななどの話も一段落ついた。

どうやら唯ちゃんが部室にCDを持っていき、みんなで聴いてくれたらしい。

そこで唯ちゃんがレコ発ライブに行くこと自慢した結果、せっかくだから軽音部全員で見に行くという話になったそうだ。

ありがとうえ、マジで。

ちなみに、梓ちゃんは途中まで一緒にいたらしいのだが、人の波に飲み込まれてはぐれたらしい。

大丈夫だろうか？

「それじゃあ私達は帰るね！またねトシさん！」

「遅いから気をつけて帰ってね、みんなも今日は来てくれてありがとうね」

さて、心配だから梓ちゃんを探すとするか。

――

――

――

「いたいた、大丈夫？これ、水だけどよかった」

「トシさん!?あ、ありがとうございます。すいません、挨拶に行こうと思ってたんですが……」

「いやいや、途中で人波に飲み込まれる梓ちゃんが見えたから心配だったんだよ。怪我してない?」

「はい、大丈夫です。少し疲れましたが、座っていたらだいぶよくなりました」

梓ちゃんは背が低いからステージを見るには前の方に行くしかな
いんだよね、……次やるときは女性と高齢者用の席でも作ろうかな。

せっかく来てくれてるのに見れないのは申し訳ないからなあ。

「あの、すごいカッコよかったです！CDで聴いて楽しみにしてたんですけど、やっぱり生で見ると全然違って……私感動しました!」

「よかった、バンド冥利に尽きるよ」

「新曲も全然違う雰囲気で、インスト曲をライブで聴いたのは初めて
だったんですけど、みなさんすごい上手で。私もあんな風にバンドが
したくなりました!」

「梓ちゃんは軽音部とか入ってないんだっけ」

「はい、私の中学には軽音部がないので……」

「それじゃあ外で組むか……知り合いなら紹介できるけど」

「いえ、まだ技術が不安なので外で組むのは……」

「じゃあ高校生になったらかな、桜ヶ丘に行きたいんだっけ?」

「はい、唯さんに軽音部のみなさんに紹介してもらって。高校生に
なったらぜひ一緒にやらないかと」

「いいなあ、同じ学校のメンバーでバンドかあ。そういうの憧れる

なあ」

「みなさん優しい人達みたいなので、今から高校生活が楽しみです！」
「うん、曲ができたら言ってくれれば川上さんに紹介するし、なんなら対バンもしたいしね」

「本当ですか!?!ぜひ対バンしてみたいです!!」

俺は今高校三年だから梓ちゃんが高校生になったら大学生になつてるだろうけど、楽器屋のバイトと講師は続ける気だからね。

……大学生になれるよね? になれるはず、たぶん、メイビー。

「もう遅い時間だけど、梓ちゃんは迎えとか来てくれるの?」

「いえ、さすがに両親に悪いので迎えは頼んでないです。駅から近いですし、大丈夫ですよ」

「いや、さすがにこの時間に一人で帰すのは怖いなあ。……ちよつと待っててくれる?」

「はい、大丈夫ですけど。一人で帰れますよ?」

「いいからいいから」

ここで登場しますは、本日車で来ているはずの我が姉。
機材とか運ぶの手伝ってもらったからまだいるはず。

「いたいた、姉さん」

「トシ、いいライブだったわよ。なにか用?」

「かくかくしかじか」

「まるまるうまうま」

さすが我が姉わかってる。

「と、いうわけで姉さんが送っていつてくれるから。遠慮せず足にして」

「いえ! さすがに悪いですよ!」

「なに言ってるのよ、教師としてこんな可愛い子を一人で帰すわけにはいかないわよ。お礼は今度会ったときに猫耳つけてくれればいいから」

「……猫耳？」

「たまに変なこと言うけど教師なのは本当だから、それに姉さんも昔はギター弾いてたから、ギターの話でもしながら乗せていつてもらいなよ」

「……本当にいいんですか？」

「いいのいいの、ほら乗った乗った」

梓ちゃんは姉さんに車に押し込まれるとそのまま夜の闇に消えていった。

はたから見たらちよつとした拉致だったけど悪いことはしてないから許してもらえらるだろ。

「おーい、トシー！そろそろ打ち上げ始めるぞー!!!早く来いよー!」

「はーい、今行きますー」

とりあえず、初レコ発ライブは大成功ということでもいいでしょう。

……いいよね？

5話

「唯ちゃん達の教室はここかな？」

「パンフレットだところですね、……すごいしやがれ声が聞こえてくるんですけど」

「……ああ、じゃあ間違いないわ」

今日は桜ヶ丘の学祭にお邪魔している。

唯ちゃんにお誘いを受け、梓ちゃんと一緒に唯ちゃんの教室を探してたのだが……。

「いゝらっつしやーい、あゝ！ドジさん！あゝずにゃん！」

「……うちのバカ姉がごめんねホントに、ホントに」

「いゝいゝんだよ！頼んだのは私だから！それより焼きそばどうだい！サービスするよお！」

「それじゃあ2つお願いします」

「まゝいゝどお!!」

ギターボーカルの特訓と称して、姉さんが唯ちゃんを鍛えた結果、ご覧のように当日に喉を潰してしまつたらしい。

マジでなにやってんだあの教師。

「はゝいゝ！焼きそばお、待ち！ライブも見てゝいゝってねー！」

「ありがとう、楽しみにしてるよ」

「私も唯さん達のライブ楽しみです！」

――

――

――

「お！お二人さんデートかい？お化け屋敷いかがですかー！」
「で、デートじゃないです!!!なに言ってるんですか律さん!!!」

さすがに高校三年が中学三年とデートしてたら捕まらないにしろ
よくないでしょう。

……真っ赤になって否定する梓ちゃんが見れたからグツジョブ律
ちゃん。

「中でムギがお化け役やってるからよかつたら見てってやってよ、梓
ちゃんにはちよつと刺激が強いかもしれないけどね」

「お！お化けなんか怖くないです！やってやるです！行きましようト
シさん！」

煽りスキルたけえな律ちゃん。
てか煽り耐性低いな梓ちゃん。

――

――

――

「うらめしや」

「お、ムギちゃん。お疲れ様、ライブ楽しみにしてるね」

「あら？トシさんに梓ちゃん、いらつしやうい」

「ムギさん、そんなお化けっぽい演技しながら挨拶しないでも」
「怖くなかったかしら？残念……」

シヨボンとってしまった。

「あれ、トシさんに梓ちゃんと……ムギ？」

あら、濡ちやんどうしてお化け屋敷の中にいるんだ？

――
――
――

とりあえず固まっけていても邪魔になるので、お化け屋敷を後にして軽音部の部室で話を聞いた。

どうやらライブ本番前の練習をしたくてメンバーを探していたが、みんなクラスが忙しく練習できないらしい。

わかる、本番前って緊張するよね。

「まあ、あんまり緊張しすぎても演奏に支障がでるかもしれないからね。俺はライブ前には好きなバンドの曲とか聴いてリラックスするようにしてるよ」

「好きなバンド……」

「滯さんはどんなバンドが好きなんですか？」

梓ちゃんの質問に、滯ちゃんは少し恥ずかしそうにしながらこちらをチラチラ見て。

「……最近はずっと『invidia』ばかり聴いてる」

あら嬉しい。

「それは嬉しいなあ、……でもリラックスできる感じじゃないね」

ハードコアだからなあ、さすがになあ。

……あ、そーだ。

「それじゃあせつかく3人もいるんだからセッションでもする？最近梓ちゃんと作ってる曲があるから、よかったら滯ちゃんがベース乗せ

「てみてよ」

「あーそれいいですね！ぜひやりたいです！」

「ええ!?私!?そ、そんな、セッションなんてやったことないし……」

「大丈夫大丈夫、ある程度コードは考えてあるから。それに気が紛れてリラックスできると思うよ」

「……それじゃあ、ちよつとだけ」

よし、正直俺がやりたいだけだけど、一旦ライブのことを忘れてみるのも一つの手だと思うし。

前に『i n v i d i a』でやったインスト曲は紆余曲折あつてt o e っぽくなっちゃったから、梓ちゃんとc h o n っぽいの作つてた所なんだよね。

「それじゃあまずは……」

――

――

――

「……とりあえず形にはなつたかな？」

「やっぱりすごいです瀧さん！初めてだったんですけど合わせたのにこんなにピッタリなんて！」

「原さんに教わつた練習の成果かな、でもトシさんはもちろんだけど梓もそんな難しいフレーズが弾けるなんて。今から一緒にバンドをやるのが楽しみだよ」

楽しんでもらえたようだなによりだ。

時間も調度いいだろう、部室の外に気配がするし。

「こらあー!!滞ー!!私達じゃなくてその二人とライブする気かあー!!カッコいいことしやがってえー!私達も混ぜろー!!」

「ずるゝいゝよ滞ちゝゃん!!! 私達とゝは遊びだったのゝ!」
「綺麗な音楽だったわあ、聞き入っちゃった……」

思いの外好評価で嬉しい。

……本格的にバンドでやってみるのもありだな。

「それじゃあメンバーもそろったみたいだし、俺達はおいとましようかな。ライブ楽しみにしてるよ」

「そうですね。せっかくですからライブでみなさんの演奏を聴きたいですし」

「えゝゝ二人とゝももゝう行っちゝやうのゝゝ?」

「そうだそうだ! 滞だけズルいぞー!」

「それじゃあまた今度機会があったらみんなでセッションしてみようか、今日はひとまずライブに集中しなきゃだからね」

機会があつたら、便利な言葉だぜ。

とりあえず滞ちゃんの緊張をほぐすというミッションは達成されたのでおいとましよう。

――

――

――

講堂の中は人でいっぱいだった。

この人数の前でライブするとかうらやましいな。

ライブハウスはライブハウスのよさがあるけど、こういう広いステージも違った良さがある。

聴かせるインスト曲ならこっちの方が映えるかもしれないな。

「すごい人です……」

「学祭とはいえこの人数の前でライブするのは緊張しそうだね。リ

ラックスしてるといいけど」

言ってるうちに軽音部達が生ステージに出揃った。

見た感じ緊張は……、してるなありや。

まあ、演奏に支障が出るレベルではなさそうか。

横を見ると、梓ちゃんがキラキラした目でステージを見ている。

「梓ちゃんもこういう所でライブしたくなかった？」

「はい、それにみなさんのバンド見るの初めてなので楽しみです！」

「そだね、ギターは唯ちゃんに聴かせてもらった……っていうか教えただから知ってるけど、ちゃんとした演奏は俺も初めて聴くから楽しみだ」

お、どうやら演奏が始まるらしい。

6話

シマパンが印象的だった学祭も終わり、そろそろクリスマスが近づいてきた。

演奏の後に感想を言いに行ったら滯ちゃんに逃げられた。

脱兎のごとく。

でも滯ちゃんの歌上手かったし、みんなも楽しそうに演奏していいよかったと伝えてもらった。

「トシさん！聴いてる?！」

「あ、ごめん、ボーつとしてた」

「わかるく、私もよくボーつとしちゃって和ちゃんにしかられるんだく」

「で、クリスマスの話だったっけ?！」

「そうそう、うちでクリスマスパーティーするからトシさんもどうかなーって。あずにゃんも誘ってるんだく」

「クリスマスパーティーねえ、まあ今年はライブの予定もないし暇だとは思うけど、でも俺が行ったら邪魔になるんじゃない?！」

「そんなことないよおく！みんなもぜひ来て欲しいって言ってたし」

「んく、だったらお邪魔しようかなあ。姉さんは誘ってあるの?！」

「あ！さわちゃん先生のこと忘れてた！誘わなきゃ!！」

「たぶん今年もクリスマスは寂しいことになってるからぜひ誘ってあげてね」

毎年のように家で酒に溺れるからなあの人。

延々と愚痴を垂れ流す機械が横にある状態でのクリスマスとかマジ勘弁。

一ヶ月前に彼氏と別れたらしいから、うちに来たら絶対ウザイことになる。

「プレゼント交換するから用意しておいてね!……あ、あと一人一芸

だよー！」

「プレゼントは暇なときに買っておくとして……、一芸かあ」

「フフフ、楽しみにしてるからね！」

女子高生にウケる一芸とか難易度高いな。

――

――

――

「梓ちゃんはプレゼント決めた？」

「はい、なんとか決まりました！トシさんも決まりました？」

「うん、面白そうなものがあつたからそれにするよ。ところで梓ちゃんは一芸なにするか考えてる？」

「ああ、唯さんが言ってたヤツですか。あれ、滯さんに聞いてみたら嘘みたいですよ」

マジかよ、騙されてたわ。

やるな唯ちゃん、さすが原作主人公。

「……そうだったんだ」

「……信じてたんですね」

「ギター一本でできるインスト曲でも披露しようかと思ってたんだけどね……」

「ぜひやりましょう！みなさんに一芸するよに説得しておきます！せつかく練習しているのにやらないなんてもつたいなすぎです！」

小さい握り拳を作り、目をキラキラさせてずいぶん前のめりに食いついてきた。

……こんな妹が欲しかったなあ。

「じゃ、じゃあ練習しておこうかな」
「はい！楽しみです！」

—————

—————

—————

—————

—————

ここが唯ちゃんの家か、立派な一軒家だなあ。
チャイムを鳴らすと「はいい」と声が聞こえてくる。

「はいい、どちらさまで……。あ！もしかしてお姉ちゃんが言った、
ギターの先生のトシさんですか？」

「はい、唯ちゃんのギター講師をしてる山中斗心です。君は唯ちゃん
がいつも話してる妹さんかな？」

「はい！平沢憂です！お姉ちゃんがいつもお世話になってます、憂っ
て呼んでください」

すっかりしたいいい子や、唯ちゃんとはだいぶ違うタイプな子だ
なあ。

「みなさんもう来てるのでどうぞあがってください。……あの、その
荷物は？」

「ああこれ？これはプレゼント交換の景品だよ、みんなには内緒にし
ておきたいから、玄関に置いてもいいかな？」

「なるほど！はい！大丈夫ですよ」

選んだプレゼントが思ったより大きかったので運ぶのに台車を
使った。

正直当たった子が持つて帰るのめんどくさいとは思うけど、まあ使

えない物じゃないから勘弁して欲しい。

「ありがとうございます、じゃあお邪魔します。あ、よかったらこのお菓子食べて」

「わあ！ありがとうございます！」

さすがに手ぶらは申し訳ないからね。

しかし、クリスマスは姉さん以外と過ごすのは久しぶりだなあ。

高校にも友達にはいるにはいるが、一緒にクリスマスを過ごすようなヤツはいないし。

バンドメンバーもコリアスさんと原さんは妻子持ちだから、クリスマスは家族優先ないパパだからな。

あ、河口さんは彼氏がいなときは姉さんとうちにきて愚痴ってたわ。

「お邪魔します、お、みんなもう来てたんだ」

「あートシさん！いらっしやうい」

軽音部のメンバーと梓ちゃんはすでに到着していたらしい。

澤ちゃんが俺の顔を見て、顔を赤くしたあと居心地悪そうにしている。

……シマパンなんて忘れたよ、俺は大人だからね。

「……あれ？姉さんは？」

「さわちゃん先生はまだ来てないよ？トシさんと一緒じゃないの？」

「いや、別々に行くって話だったから。……まあそのうち来ると思うよ」

マイペースな姉さんは放っておいてもいいと思う。

すねるかもしれないけど社会人なのに時間守れない自業自得というやつだ。

……あ、噂をすれば姉さんが忍び込んできた。

無駄にスニーキングうまいな。

「そつかあ、……それじゃ和ちゃんも遅れるって言ってたし、先に始めよつか!」

「そうね」

「「……え!?!」」

ちよつとした阿鼻叫喚になった。

しかもコスプレを強要しだしたし。

いや、唯ちゃんはノリノリだったからいいけど、澪ちゃんと梓ちゃんは本気で嫌がつてるからダメだろ。

「はいストップ」

チヨツプ

「痛つ!?もう、なにすんのよトシ」

「仮にも教師なんだから、男の前で女子高生にコスプレさせようとするなよ……」

「トシさあくん」

澪ちゃんと梓ちゃんがメシアを見るような目でこちらを見ている。

姉さんを凶行を阻止している間に真鍋さんも到着したらしい。

「はじめまして、真鍋和といいます。トシさんですよ?唯がお世話になってます」

「こちらこそはじめまして、山中斗心です。真鍋さんのことも唯ちゃんから聞いてるよ」

「和で大丈夫ですよ。みんなも名前で呼んでいるみたいですし、私もトシさんとお呼びするので」

「じゃあ和ちゃんでもいいかな?学校で姉さんが迷惑かけてるかもしれないけどごめんね?」

「ちよつとそれどういう意味よ〜」

そのままの意味だよ。

「それじゃあみんなそろつたし、さつそくプレゼント交換するかー!!!」

「「「おーーー!!!」」」

これが若さか！

ちなみに俺のプレゼントはでかすぎるので、引換券という形にしてある。

見た目一番ショボいけど気にしない、いいね？

「それじゃあプレゼント交換するわよー!!!」

こうしてプレゼント交換が始まった。

みんなでジングルベルを歌いながら手渡ししていき、歌が止まったところで持っているプレゼントを受け取るらしい。

……てか姉さんのプレゼント、一ヶ月前に別れた彼氏にあげるつもりだったやつじゃね？

張り切つてだいたい早めに買つてるのを自慢された覚えがある。

使い回すなや。

「……ストップ!!!さあ、プレゼントはなにかしらー!!!」

最終的に姉さんは律ちゃんのプレゼントになった。

姉さんが開けた瞬間、ビックリ箱が顔面にクリーンヒットした。

無言で律ちゃんにサムズアップする。

「……フフフ、アツハツハツハツハ!!!楽しいわあーーー!!!たのすいわあーーー!!!メリイクリスマスウーーー!メリイイクリイスマスウウウ!!!」

ぶっ壊れた。

いつものことだから気にしないけどな。

俺がもらったプレゼントは姉さんのチョイスしたデスメタルバンドのCDだった。

前も思ってたけど彼氏にあげるもんじゃねえよな、聴くけど。

唯ちゃんが「これを彼氏にあげるつもりだったんですか?」と聞いて姉さんがまた騒ぎだした。

どんまい。

「私のプレゼントは……手紙?」

「それは俺のプレゼントだね、開けてみてよ」

「トシさんのですか!?開けてみます……引換券?」

「そ、ちよつと大きいやつだから邪魔になるかと思って玄関に置いてあるんだ。今持ってくるよ。」

玄関に置かせてもらっていたプレゼントを居間に持ってくる。

「うわ!?デケー!」

「なにになに!?何が入ってるの?」

「あの一開けてもいいですか!」

「いいよ〜」

漣ちゃんが包装を丁寧に剥がしていく。

こういうところだね、姉さんだったら問答無用で破り捨てるし。

少しは漣ちゃんとかムギちゃんとか和ちゃんに学んだ方がいいと思う。

「これは……ギターアンプ!」

「惜しい、ギターアンプの形をした冷蔵庫だよ。前に懸賞で応募したら当たったやつなんだ。俺は使わないから、よかつたら自分の部屋と

か部室とかで使つてよ」

「え、こんな高そうなものいいんですか!？」

「うん、懸賞だからタダだったからね。ホコリ被らせとくのもつたいないから」

「滯！それは我が軽音部の部室に置くことにしよう！そうすれば夏場でもムギのお菓子を冷たくしておける！」

「そうだねりっちゃん！ぜひ軽音部に置くべきだよ！」

「わかったわかった、……ありがとうございますトシさん、この冷蔵庫はみんなで大事に使いますね」

「うん、仲良く使つてくれたら嬉しいかな」

こうして無事？プレゼント交換は終わった。

和ちゃんの海苔の缶詰というチョイスは個人的に好きです。

「よーし！それじゃ一芸披露でもするか！」

――

――

――

憂ちゃんの腹話術がなかなかの完成度だった。

姉さんの紅葉は女捨ててる感じあるから他所ではやるなよ？

ムギちゃんのマンボウの真似は芸術点高かった、推せる。

あと滯ちゃんのミニスカサンタは破壊力あった、さすがに直視するのは憚られたので見ていないふりをしてこっそり見てました。

ごちそうさまです。

現在は梓ちゃんが持つてきたアコギでふわふわタイムの弾き語りをしている。

なかなかの完成度に軽音部が喜んでる。

「……どうだったでしょうか？」

「すごいよあずにゃん！さすがだよ！」

「ああ、弾き語りにするといつもと違った感じで面白いな」

「こりや来年からボーカルは梓かな？」

「りっちゃん!? 私はクビなの!？」

「ハハハ、冗談冗談」

みんなに誉められて照れてる梓ちゃん可愛い。

さて、次はいよいよ俺の番か。

「次はトシさんだよ」

「はいはい、それじゃあちよつと準備するから待ってね」

「ん？トシさん、そのちっちゃいアンプみたいなのになに？」

「これはアンプだよ、ライブとかだと使えないけど部屋で弾く分には十分な音量は出るからね」

「可愛い〜！いいなあ、私も買おうかなあ」

「可愛いって……でも一つ持つてると便利かもしれませぬね」

確かに便利だし可愛い、見た目マーシャルそのまま小さくした感じだからインテリアとしても使えなくもない。

「あれ、そのギター7弦ですか？」

「本当だ！私のより一本多い！いいなあ」

「なに言ってるんですか唯さん、7弦ギターは弦が増える分ネックも広くて運指が大変だし、ミュートする弦も増えるから大変なんですよ」

「そうだな、それに放課後ティータイムじゃ7弦を使う曲はないし」

「そっかあ、7弦にしたらギターがもつとカッコよくなると思ったんだけどなあ」

「6弦ギターは7弦にはできませんよ……」

「ところでトシさんはどんな一芸をするんですか？」

いい質問だ滞ちゃん。

「最近作ったインスト曲を披露しようかなって。……といっても普段『Invidia』でやってるような激しいのじゃなくてリラックスできる曲だから安心していいよ。和ちゃんや憂ちゃんもいるからね」

さすがに慣れてない人にメタルみたいなギターを聴かせるほど鬼畜じゃない。

姉さんとか河口さんはやりかねないけど。

「……よし、それじゃあ準備できたからそろそろいくね。まだ仮だけど、タイトルは『be11』……」

――

――

――

……とまあこんな感じなんだけど、どうかな？」

……反応がない。

全員固まってしまっている。

あ、唯ちゃんが復活した。

「すごい!!すごい綺麗だったよトシさん!!」

「お、おお、ありがとう」

「……すごかったです!こんな綺麗な音色でタッピングまでしてほとんどミスもないなんて、さすがですトシさん!!」

唯ちゃんと梓ちゃんに好評でよかった。

その後も続々と復活した軽音部メンバーが絶賛してくれた。

ちなみに律ちゃんは運指を見ていて酔ったのか、途中から目をぶつっていたの覚えてたからな？

「……唯、あなた本当にすごい人にギター教わってるのね」

「でしょー！トシさんはすごいんだよ」

「よかったら和ちゃんと憂ちゃんの感想も聴きたいな。この曲は普段ライブに来たことがない人でも楽しめないかなと思って作った曲だから」

ちなみに参考にしたのは ichikasa さんの『a bell is not a bell』という曲だ。

綺麗なインスト曲だから、ライブ慣れしてない人でも興味を持って欲しいと思って作ったからね。

「そうですね、……私はあまり音楽は聴かないので細かいことは言えないですけど、すごくいい曲でした。できればもっと聴いていたいと思えるような」

「私です！お姉ちゃんのギターは聴いたことがあるけど、ギターってこんな音も出せるんだなって感動しました！」

「ならよかった、……もしかしたらそのうちライブとかCDも作るかもしれないから、その時はぜひ来て欲しいな」

「はい、ぜひ誘ってください」

「あ！ズルイ！私も私も！」

「私です！」

掴みは上々みたいでよかった。

こういった普段音楽を聴かない人達がライブに興味を持つてくれると嬉しい限りだ。

それだけで今日来たかいがあった。

「トシさん！私にもさっきのピロロってやるやつ教えてー！」

「唯さんにタッピングはまだ早いと思いますよ？」

「えー、あずにゃん厳しいよおー」

……まあタッピング教えるのはいいんだけど、そうすると変な上達の仕方することになると思うよ？

前にスウィープ奏法だけ練習してた先輩がいたけど、スウィープはめちゃくちゃ上手いのになコードは一つも知らないっていう変人になつてたからね。

……いや、どこで使うのそのスウィープ？

「あ、そういえばトシ、あんた軽音部でコーチしない？」

「」「」「え？」「」「」

いきなりなに言い出してんだこの姉は。

「私は一応顧問だけどギターしか教えられないじゃない？トシなら全部の楽器を一通り教えられるから調度いいかなあ〜って」

「いいよそれ！さわちやんさすが！」

「たまにまともなこというよなあ〜」

「……りっちゃん、たまにっってどういことかしら？」

「げ！いや、それは……」

体罰はあかんやろ体罰は。

「でも桜が丘って女子高だろ？さすがに男の俺が行くのは問題になるんじゃないか？」

「それなら大丈夫よ、もう校長先生から許可はもらってるから」

「はっ？」

「私の弟だっって言ったら問題ないって、このさわ子先生を甘く見ないことねー！」

「さわちやん外面だけはいいいからなあ〜」

「……だけってどういうことかしら？」

律ちゃんこりないなあ。

「トシさん！コーチしてよ！トシさんがコーチだったら滯ちゃんもムギちゃんも嬉しいよね!!」

「……確かに、練習といっても独学でやってきただけだから。……もしトシさんが迷惑じゃないなら、コーチしてくれたら嬉しい、かな」
「私もです、音の作り方だけでも教えてもらえたら嬉しいです」

マジか、いや、学校終わりにバイトない日なら全然行けるけどなあ。

「……ん〜、じゃあとりあえず仮コーチとして何回かやってみようか？軽音部はいいかもしれないけど、他の生徒達から苦情があったら不味いからね。女子高に年の近い男がいるのを嫌がる子もいるかもしれないからね」

俺の言葉に、若干不安そうにしていた和ちゃんがホッとするような表情を見せたので正解だったのだろう。

「つてことで大丈夫かな姉さん？」

「え？あ、うん、いいんじゃない？」

話聞いてなかっただろこいつ。

――

――

――

こうして、クリスマスパーティーは無事？終わり新曲のお披露目は成功、そして、桜ヶ丘での仮コーチをすることが決まった。

あと姉さんが、無礼すぎた罰として律ちゃんにミニスカサンタコス
をさせていた。

しかも、可愛いからと前髪を下ろさせていたためメチャクチャ恥ず
かしがってた。

澤ちゃんの時のように見ないフリをしようとしていたら、姉さんに
罰にならないからとしつかり見ろと言われた。

感想を求められたので「前髪を下ろしているのも可愛いくて似合っ
てる」と伝えたら真っ赤になって隠れてしまった。

なにあの可愛い生き物。

7羽

俺の大学受験も無事終わり、近くの大学に進学することができた。バンドサークルがあったので見学に行ったら『i n v i d i a』のファンという人がいて照れてしまった。

あまり活動には参加できないが、たまに顔を出す程度でいいからと入部することになった。

軽音部のコーチとしてはもう何度かお邪魔している、今は新歓に向けての練習中だ。

まあ、梓ちゃんが無事合格したから一人は確定してるんだけどね。どうせならもう一つバンド組めるぐらい人が集まるといいよね。

『i n v i d i a』の活動ももちろんしている。

音源も作成できたので、今はコンテストに応募しているところだ。グランプリを取れば、有名なフェスに出演することができるといので頑張りたい。

一次の音源審査は通ったので、次はネットでの一般投票、そして上位10バンドが実際にライブ行って、グランプリを決めるらしい。正直メンツ的には残ってもおかしくないと思っているので、あとはジャンルの一般受けするかといったところだ。

まあ、なるようにしかならないと思うので、そこまで気にしてはいない。

――

――

――

「……なるほど、で、今のところ梓ちゃんしか捕まえていないと」

大学の方がいろいろ落ちついたので、新歓ライブが近いという軽音部を見に来た。

なぜかキグルミで出迎えられた。

「ちなみになんでキグルミ着てるの？誰がどれ？」

「かわいいからだよ！」

「おっけー、唯ちゃんはわかった」

話が一番通じる瀧ちゃんに事情を聞くと、姉さんが持つてきたらしい。

バカじゃねえの？

ちなみに、二番目に話を通じるのは以外にも律ちゃん、根は真面目らしい。

唯ちゃんとムギちゃんはネジ飛んじやってる時がたまにある。

「……すいませーん」

「お邪魔します……あれ、男の一人だ」

後ろから声があったので振り向いてみると、そこには憂ちゃんと見知らぬ癖っ毛ツインテールの子がいた。

事情を聞いてみたところ、どうやらあまりにも人がいないことを心配した憂ちゃんが友達を連れてきたらしい。

友達も純ちゃんというらしく、ベース志望らしい。

できた妹だ、……というか憂ちゃんは入部しないのだろうか？

「よし！それじゃあコーチ！よろしくお願いします！」

「……ごめん聞いてなかった、もう一回お願い」

「えー？だからー、1年生にカッコいい演奏を見せてあげてくださいってー」

「いや、とりあえず放課後ティータイムの演奏見せてあげなよ」

「そうだよ！っちゃん！私達、先輩なんだからね!!」

そりやそうだ、あくまでコーチですからね。

まあ、コーチの腕が心配だから弾いてみろって言われたら弾くけ

ど。

せつかく1年生が入ってくれそうなら、先輩達のカッコいいところを見て決めて欲しい。

――

――

――

「……お姉ちゃんカッコいい!」

「……すごかったです!」

しっかりと後輩の心を掴めたいらしい。

純ちゃんは後半濡ちやんに釘付けだった、濡ちやん背高いし姿勢もいいからベースが映えるよね。

これなら純ちゃんも軽音部に入ってくれそうかな?

「……失礼します、……あれ、演奏終わっちゃいましたか?」

「あ、あずにゃん」

「はい、友達を連れてきたんですけど……」

「やるなあずさ!大丈夫大丈夫、これからトシさんが演奏してくれるから!」

なに言ってるんだこの子、いやグツじゃなくて。

「本当ですか!?よかった!ほら、春香も聴くでしょ?」

「トシさんってあずさが教わってる人だよね?……じゃあ聴いてみようかな」

……気がついたときには、すでにやるしかない空気が出来上がっていた。

いつの間にやら唯ちゃんのギターを渡され、1年生は椅子に座り、

2年生がその後ろに控えている。
もう にげられ ない。

「……はい、じゃあ弾きます」

――

――

――

「……とまあ、こんな感じかな？」

7弦じゃないので、前回の『bee1』は弾けなかった。

仕方ないので、みんなが知っているであろうプリンセスオブモノノケから、アシタカせっ記を弾いてみた。

反応は上々だ。

「さすがあずさの師匠……あの曲ってギター一本で弾けるんだ……」

「トシさんは普段はオリジナルバンドでギターボーカルしてるから、歌もすごく上手いんだよ」

あずさちゃんあんまりハードル上げないでお願い。

純ちゃんは大丈夫かな？ 固まってるけど。

「すごかったです、ね！……純ちゃん？」

「……決めた、私軽音部入る」

お気に召したらしい、よかったよかった。